九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

石垣原合戦記 九州の関ケ原、石垣原合戦を題材とした軍記・伝記史料（上）

守友, 隆
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4493116

出版情報：比較社会文化研究. 26, pp.1-12, 2009-08-31. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第二十六号（2009）一～十二頁
Social and Cultural Studies
No.26（2009）, pp.1～12

石垣原合戦記
九州の関ヶ原、石垣原合戦を題材とした軍記・伝記史料（上）

守友（モリトモ）　隆（タカシ）

【解題　上】

「石垣原合戦記」は福岡藩藩祖黒田如水（孝高）とその子長政について、黒田家が筑前五十二万石の大大名に上り詰める契機となった慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原合戦、それとほぼ同時期に九州で起こった、現在では九州の関ヶ原合戦とも呼ばれ、徳川方（東軍）の如水と旧豊後の領主であり石田方（西軍）に与した大友義統が激突した石垣原合戦を中心に記したものである。[1] 作者不明であるが、黒田家については史実とそれほど乖離せず詳細に記されていることから黒田家に縁のある人物、具体的にいえば福岡藩士などによって記されたと考えられる。成立の時期も記されていないため正確なところは不明であるが、この史料に登場する諸侯の官名、とりわけ上杉氏の官名から延宝三（一六七五）年以降と考えられる。[2] また、「常山紀談」に記されている逸話を参考にしたと考えると、その成立年代はさらに下り、元文四（一七三九）年以降ということになる。[3] 本稿では紙幅の関係上、本史料の内、「関ヶ原一乱発并諸大名奥方人質之事」から「実相寺山ニ而首実検之事」までを紹介する。以下、今回掲載部分で特徴的な点を記すこととする。

この史料の一番の特徴は黒田如水、さらには黒田家を賞賛する意図で記されていることであろう。ただ注目すべきは如水の人物描写である。如水のあまり知られていない逸話を記すことによって如水という人物を生き生きとした「人」として描き、無味乾燥な聖人君主、神のようには描いていない点はすぐれた「伝記」物の性格を強めていると考える。[4] 具体的には、如水夫人・長政夫人が石田方から逃れて大坂を脱出し、如水のいる中津城に着いた場面である。この場面では如水の喜びが端的に表現されており、それは如水が終生側室を置かず、正室の幸円と睦まじかったことと考え合わせると、その喜びは妻と息子の嫁の無事を喜ぶ純粋なものと解釈できる。またその一方で怒りの描写がしばしばあり、そのように喜怒哀楽を隠さない人間らしい如水がそこにいるのである。

また、この史料は如水の晩年のハイライトシーンを描いた「伝記」という見方もできる。書名の通り「戦記」としての面ももちろんあるが、見出しからも分かる通り十三の内六つに如水の名が含まれており、また含まれてないものでも如水が主語となるものも合わせるとさらに三つ増え、ほぼ三分の二の場面が如水中心に描かれている。

とはいうものの、やはり「戦記」・「軍記」、さらにそれを昇華させて「文学」といえ work of art 技巧が施されている場面もいくつかある。例えば「軍記」には定番の一騎打ちである。石垣原合戦では個人戦から集団戦法がとられるようになった近世初期には珍しく両軍の名のある武将、黒田家重臣井上之房と大友家重臣吉弘統幸が一騎討ちをしており、これは「黒田家譜」などにも類似の記述がある。[5] この点が「軍記」としての性格を特徴付けている。一方、久野次左衛門・曽我部五右衛門の最期については「あへなく石垣原の露と消けり」、「終に討死致しけるそむさん也」とあり「文学」的表現がなされている。他にも兄弟愛を描いた場面がある。[6] すなわち、兄の大野勘右衛門が大友方の宗像掃部に討たれそうになるが、すんでのところで弟の休也（久弥）に助けられる場面である。「黒田家譜」には勘右衛門が対決したのは宗像掃部ではなく深栖（ふかず）七右衛門、休也（久弥）は小田原又左衛門、とある。[7] この史料の「文学性」・「物語性」を高めるために作者が敢えて創作性を加えたのではないかと考える。すなわち、石垣原合戦という合戦を単に伝えるためだけではなく、何か作者の信念のようなものをこの作品に吹き込みたかったのではないかと推測する。[8] そのため、正確な史実を反映したものとは言い難い部分もある。

この史料の価値は、作者不明ながら、他の「戦記」・「軍記」作品に劣らず近世に生き

た人々の価値観・意識、武士に対する評価も採り得る点にあろう。

また、本史料の検討のために用いた「黒田家譜第十二巻・第十三巻如水記」は隠退した如水、とりわけ石垣原合戦時を中心に記されているため他の巻と異なり軍記的要素（軍記文学的要素）が強いと考えている。[9] その仮説は黒田騒動を記した「忠之記」と実録体小説「箱崎釜破故」[10]などを比較検討することにより、「黒田家譜」の「文学性」について明らかにできるのではないかと考えている。[11]

【凡例】

(1)見出し相当部分は太字にした。

(2)史料中には適宜注を付し、必要な場合は補注番号を加え、史料末尾に列記した。

(3)原文に読点（、）を加え、また並列点（・）を適宜挿入したほかは、文章体裁を含め原則として原文通りとした。ただし、行下りは字詰めのため原文とは異なる。

(4)漢字の字体は原則として新字体を使用した。

(5)原史料に用いられている古体・異体・略体などの文字は便宜上活字体に直した。また変体仮名は江・而・者のほかは全て平仮名に改めた。

(6)誤用の訂正や註釈のため右側に丸括弧を付し傍注を加えた。

(7)墨抹で本来の文字が読めない場合は■記号、墨抹のあるなしにかかわらず本来の文字に訂正がある場合はその右側に訂正文字を付した。この場合、原文にある文字なので丸括弧は用いない。文字の解読ができない場合には□記号などで表現した。その際右側に想定される文字や注記（虫食いなど）などを丸字括弧内に適宜付した。

【釈文】

豊後国石垣原合戦記目録

関ヶ原一乱発并諸大名奥方人質之事、／如水公・長政之奥方、中津江送り奉ル事、／如水公、木附ノ城御順見之事、／大友義統（すミ）、豊後国下向之事、／如水公、中津城御出馬之事、／石垣原合戦之事、／実相寺山ニ而首実検之事、／加藤清政（ママ・正）（ママ・使カ）検者之事、／大友義統、降参之事、／筑後柳川城責并如水公扱ヲ入給ふ事、／上方勢敗北、如水公上洛之事、／如水公、鹿ヶ谷御留滞之事、／筑前入国之事、

豊後国石垣原一乱記

関ヶ原一乱発井諸大名奥方人質之事

一、大閤（ママ）秀吉公御他界之刻、御老中[12]いつれも御前に召寄られ、仰渡されけるハ、猶、子豊臣秀頼公いまた御幼君にてましませハ、御後見として東国三拾三ケ国（ママ）ヲ徳河（ママ）内府家康公ニ御預ヶ有り、[13] 毛利宰相（ママ）輝元[14]に御預ヶへし、秀頼十五才ニ及候ハヽ、天下ヲ相渡へき由ニ而、起請文ヲなすセられ、則、両将領掌に有けれ者、太閤御他界ます、神ともあかめ、豊国大明神正一位大政（ママ）大臣とそ申奉るニ、家康公ハ関八州の内、弐百万石ヲ預ヶせられし事なれハ、権威弥増にて、武家のならひ事なれは、慶長（一六〇〇）五年に至りけれ者、大閤（ママ）の五奉行職、石田治部少輔三成叛逆ヲ企、秀頼公の命として西国の諸士ヲかたらい、関東ヲ片むけんと計り事ヲめくらしける、大名衆には、浮田（ママ）中納言（宇喜多秀家）・毛利宰相（ママ）輝元・筑前中納言秀秋・嶋津文（ママ・兵カ）庫頭義久（弘カ）[15]・小西摂津守行長・安国寺（ママ・惠）両慶長老・大谷刑部少輔（吉継）（ママ・守）[16]・立花飛驒頭・垣見和泉守[17]・熊谷内蔵之丞[18]・上杉弾正大弼景勝[19]とふを初メとして諸大名雲霧（ママ）の如く濃州青野原ニ集りける、扨、家康公方の人々には、加賀大納言利家卿（ママ）[21]・井伊掃部頭直政（ママ）[22]・本多中務少輔（ママ）[23]・酒井雅楽頭（忠興）[24]・細川越中守・小笠原兵部（秀政）[25]・福嶋左衛門太夫（正則）・田川（ママ・中カ）兵部大輔[26]・池田三左衛門輝政・蜂須賀阿波守（家政）[27]・久久保加賀守・鍋嶋加賀（直茂）・伊達陸奥守[28]・奥平藤兵衛[29]・藤堂大学頭[30]・京極若狭守（高次）・安藤帯刀[31]・成瀬隼人[32]・黒田甲斐守長政等ヲ初（ママ）として無二之忠臣として内府の命ヲそ承りけれは、依之隠居如水公、関東一味ヲなし玉ひ、然ル処に大坂城下にまします諸大名方（ママ・奥脱カ）を秀頼公ヨリ人質として城中江入られんとの事定りけれ者、黒田長政公の御屋敷ニましますの如水公の御台所（侯利氏・栄姫・大源院）并長政公之御内室（櫛橋氏・幸円・照福院）御両所を何卒中津ノ城下江送り遣しなんとそ、家臣栗山四郎右衛門（備後・利安）・毛利大兵衛（母里）（ママ）（友信）心を合セて、其志ヲなして申けるハ、今程御主人方関東方御一味ニ而有ハ大坂方江人質ニ出しては以の外の不忠たるべし、此上は、天満橋町何某ヲかたらい、御忍申へしとて、則、かの町人ヲ召出して、何卒貴殿我々に一味ヲなして蜜（ヒソカニ）にかくまい奉り呉（クレ）よと頼ミけれは、両人喜悦してさらは御忍び申奉りらんとそ、頓而天満橋町江移し奉り、御両所下女の姿となし奉り、一間有る所ニ置奉り、宮崎織部ヲ附添、此者も町人と見せ掛て御養育ヲなし奉る、御屋敷ニハ吉田宮内[33]か妻女、殊の外御台所の御姿に似たりける故に打掛ヲ着セてそ、奥方の躰にもてなしてそ置ニけり、去程に大坂方之石田治部少輔、大谷刑部少輔と申合て、此上ハ関東弥征伐有べき故ニ、敵方之奥方ヲも人質ニ取置て敵方ヲ変改サセ、一味ニ加へ申へしとて、大勢之武士ヲ出して諸大名之家敷〳〵ヲ廻り候に、既ニ細川越中守忠興の家敷江押けれは、此御台所聞召（細川ガラシヤ）て、のたまわく、御つれ合も今度家康公江無二と之御知らセ有ル上ハ、いかてか敵方ニ人質とし

て出へき、さら者恥辱ヲ取んよりハとて御守刀ヲ抜給ひて御自害有しハ、其家ニ火ヲ掛て一時に焼立けり、[34]依之大坂中火災に依て周章する事なゝめならす、上ヲ下江そかゑしけり、

如水公・長政公之奥方、中津江送り奉る事

一、大坂大火ニ及ひけれは、栗山四郎右衛門・毛利太平（ママ）と申合テ、扨てそ宜敷計り事有り、唯今ノ火災に寄て兎角御台所ヲ参宮道者となし奉り御背中ニ御抜ヶ合セ奉りて宮崎織部（安尚）[35]ヲ且又道者となし、御供申けれハ、栗山四郎右衛門ハ家来大勢召連テ、半丁程跡ヨリ備して見送り奉る、是ハ若又不慮なる事も有時は、一働して追払わんとの計り事也、毛利太兵衛ハ川口番所のかたわらニ大勢家来ヲ引具して朱大身の鎗ヲぬきかけ来り、若又番所にて御急難もあら者、防き戦わんとの事なり、既ニ此番所（バン）に来らセ給ひ、番人共是ヲ見て咎メけれは、宮崎織部、伊勢参宮のよしを申所に、毛利太平（ママ）大イの目玉ヲむき出シて申ける、我は大谷刑部少輔下知に依而爰ニ有り、此火災に依て若諸大名之奥方忍ひなられん事もやとて改の為として唯今改メ置たり、返すくと申けれは、依之番人も咎メずしてゆるしけれハ、御台所（ママ・虎カ）疫口の急難もたやすくのかれ給ひて、頓（ヤカテ）而中津の城下ニ（ママ）来りける御舟に乗セ奉る、船頭松本孫七郎[36]かしづき奉れハ、毛利太平（ママ）も御供して大坂川口ヨ出帆して、順風にてそ下らセ給ひ、栗山四郎右衛門、はりまの友うらまて来りて、此所ヨリ舟のりてそ中津の城下へそ急きける、

如水公、木附城御順見之事

豊前国中津城には、黒田如水公（初ハ官兵衛 後ハ甲斐公と）号（ママ・勘解由カ）、御隠居ニてまします、先年大閤（ママ）秀吉公、九州征伐（セイバツ）の時、如水公ヲ毛利輝元の軍目附として附添置給ひしに、薩摩国耳川（ママ）の戦巧（ママ）[37]に依而豊前国八郡之内、中津ノ城六郡拾弐万石ヲ如水ニ下され、小倉ノ城二郡毛利壱岐守（勝信）にそ下されけり、今度長政と共ニ関東方ニ御志ヲなし給ひ、折節、豊後国府内（ママ・高田カ）ノ城主竹中源助（後ニ伊豆守とも号ス）[38]来駕有りけれは、中津ノ城下之茶屋ニてもてなし、終ハ御物語ヲなし給ひて、後ニ源助も帰られける所に上方ヨリ長政公ノ飛脚至り来しけれ者、御書ヲ披見あるに徳川府内（下上）家康公、今度上杉景勝謀叛之聞へ有けるに寄て陸奥国江御進発あるに、下野国宇都宮に御滞座のおりから、御跡にて上方勢雲霧之如く石田治部少輔叛逆ニ随ひ、一番ニ伏見之城御留主居鳥井（ママ・恩）彦左（ママ・右）衛（元忠）門ヲ責落し、美濃国青野か原ニ出張して御跡をさへきりて、すてに御一戦に相極上ハ、諸国ニ敵城多し、御油断有ルへからす、其上、大友左兵衛尉（ママ・督カ）義統、秀頼公の命ニ寄て豊後国江下向する由風聞仕候由得て告知（ツケ）らセられけれは、如水公驚き給ひ、さら者源助も遠くハ行れまし、早、呼寄来ルへしとの事なれは、早速使者ヲ立られるに、頓而源助も来られける、如水公のたまわく、既ニ大坂方にて石田治部少輔叛逆に紛なし、其上、大友義統、豊後国江下向する由なれは、貴殿事弥我々ニ随ひ聞東方御一味あらは、家をおこさるゝのもとひなるへしとの事なれは、源助もじだんセられて、夫ヨリ軍評定有りてそ帰られける、如水公ハ家老井上九郎左（ママ・右）衛門（之房）其外諸士ヲ召寄られて、軍評定有ル所に御□□（判読不能）所申上けるは、御城の要害ヲ第一として御普請ヲなし給ふへしとそ申上けれは、如水公ノたまわく、成ルほと端城ニ而随分堅固ニ普請ヲなすへし、本城は普請ニ及まし、我計り事ヲ方寸ノ内ニめくらすに於は、敵軍何万騎寄セ来ル共、城外に出張して軍巧ヲなしぬら者、中々城ニ寄来ル事有ルへからす、是運ヲ以謀事をめくらしの備也、我愚将にして計事薄く軍命つきぬるに於は、唐土のかんやうきう（咸陽宮）ヲマナひ（学）、城ヲ石のかろふと（唐櫃）に入れ、天ヨリくさり（鎖）を以テつり上たりとも勝利ヲ得る事有べからす、[39]兎角城附用金ヲ以テ諸牢人ヲ招キ寄、召抱ル事肝要なりとて、御触をなして有けれは、如水の英勇才覚ヲ賞美し奉りて、我もく集りける、豊後国木附城は細川越中守忠興ノ留主城ニして、家老松井佐渡（康之）・有吉四郎右衛門（立行）、小勢ニ而籠りける、越中守ヨリも今度我関東方無二なれは、貴殿事随分堅固ニして黒田如水近隣ニ有ハ彼ヲ頼而、諸事申合すへしとの事なれは、何れも畏りける所に如水公此事心元なく思召れ、御船に乗セ給ひ、領分□々ヲ御順覧ニ有りて後、木附城江そ来駕有ル、松井・有吉、城中要害等の事ヲ御差図ニ任セ奉らん事を願ひけれハ、夫々に御差図有て、頓而中津江御帰りまします、扨、大友義統、上方ヨリ下向するヨリ、此上は使者ヲ立テ、関東一味ヲすゝめぬらんと思召て、宇治勘七（ママ）ヲ使者として周防之国ノ上ノ関[40]と言所に得て遣し置給ひ、扨、仰越れけるハ、今度左兵衛尉（ママ）殿事、秀頼公の仰ニ依、豊後国江下向之由、然ル処ニ石田治部少輔叛逆に企、我等御勇（ママ・諫カ）ヲ申候者、今度家康公、仁義の政務ニ依て関東ヨリ此ヲしつめらるゝ、依而大友殿我に随ひ候得ハ、関東江申直して我家ヲ再ひ（フタヽヒ）引おこし給ハん事治定なり、其上、大閤（ママ）の御恩徳多きといへとも、石田元来邪より起りて既ニ御寒（ママ）気ヲ蒙らるゝ、[42]弥関東方御一味有度し、其儀御相談の為、直ニ中津の城下江御来駕と願ひ奉り候由ヲそ委細ニ申遣されける、

大友義統、豊後国下向之事

大友左兵衛尉（ママ・督カ）義統ハ、大友宗麟公の子にして、元ハ九州探題職ヲ蒙る、然ル処、義統家督して其家ヲおこす処に、先年高麗陣の時、小西摂津守行長の居城、是ハ大明国近

し、其使に大友義統、大軍にてつなき城ヲ堅メラル、是は、若小西大軍ニ取巻れ危からん時救之為也、其次ニ黒田長政の家来小河伝右衛門の端城ヲ近くする所に大明国ヨリ韃靼ヲかたらい、日本ノ勢ヲ防きけるに、大軍百万騎ニて小西か籠ル城ヲ取巻キける、摂津守計り事ヲ廻らし数度戦といへ共、目ニあまり大勢なる上、韃靼人殊の外強勇ヲ振ひ働きけれは、終ニ小西敗軍して逃けれとも、大友救ひヲ出す事なく、戦すして朝鮮の都江落行けれは、小西ハ頼ニ小河伝右衛門（信章）小城迄落行て一命ヲ助ける、伝右衛門、殊の外の勇将ニて、此所にてさへけり、味方の勢来り救ひけるとかや、此事肥前国名護屋之城ニ告知らセけるは、伝右衛門にハはつくんの御忠賞ヲ給り、大友ハ臆病なりとて大閤（ママ）殊の外御怒り有、所領召上られ、中国毛利輝元ニ御預ヶ有ル[43]、御勘気ヲ蒙ル事か数年斯の如くなる、面目ヲ失ふ所に、今度毛利輝元の指図ニ依て大坂江左兵衛尉（ママ）ヲ召寄セられ、秀頼公上意有り而、貴殿事数年大閤（ママ）の御勘気ヲ蒙ルといへ共、此度召され再ひ豊後国ヲ賜るへし、随分忠勤ヲすへし、尤、九州ニ敵多し、是ヲ亡スへきのよしの上意にて御馬百疋、鎗百本、鉄鉋百丁、金黄（ママ）三千枚ヲ御引出ニそ下されけれは[44]、大友昔の家臣とも聞伝へ馳加りける故に、大軍ニて大坂ヨリ数百艘舟に乗り出帆して上ノ関江そ来りける、時ニ如水公の使者宇治勘七罷出、如水公の使者ヨリの一書ヲ渡しけれは、大友家老田原紹忍受取て、夫ヨリ詮儀ヲなして頓而返書ヲ出されける、尚又口上ヲ以テ申されルハ、既に拙者儀、今度秀頼公の上意ニ依て豊後国江下向致し候、此上如水公儀、殊ニ大閤（ママ）の御旧恩たる上は、早速関東ヲ浦（ママ・裏カ）かへり、早ク拙者ニ随ひ無二との忠義ヲはけまるへし、此上ハ秀頼公ニ申達し、宜敷執成致スべきなれば、豊後国下着之砌り、早々如水公江も罷出られ軍評定ヲなし、忠巧ニ依てハ大国ヲ数多下さるへきの条、弥御了簡然ルへしとて返書ヲなしける、勘七受取てそ帰りける、是そ軍の根元となる、

如水公、中津城御出馬之事

黒田如水公ハ宇治勘七ヲ使者として大友左兵衛之尉（ママ）江遣し給ひし後、何分返答有やと相待給ひし所ニ、中津之海辺ヨリ見物（ママ）の者来りて註進仕りけるハ、御台所方の御舟と相見江、はるかに帆印相見ル由なれハ、如水公聞シ召され、扨こそ〳〵目出度、帆印出世のもとゐとのたまいて、頓而浜辺江出られけれハ、御舟も次第〳〵と近寄、頓而浜辺江着岸す折節汐引けれハ、御家中諸士ヲ始め〳〵して、大勢にて御舟をなきさに引よせ、頓而御台所御両所ヲ中津の城江入れ奉れハ、如水公御喜悦不斜折節、中津の町に有ル歌舞致ス役者を召出されて、是ヲ御慰の為とて舞台ヲ掛させ、興行をさセらるゝ、諸士ヲ始メ町人まて見物被仰付に、誠に一乱の時に至りて如水公の御ゆうち（ママ・悠長）ゆう御英勇の程を誉奉らぬハなかりけり[45]、既ニ大友義統、豊後国に下着しけれ者、旧恩の地としてよしミの者多かりしそ、我も〳〵と招に応して随ひけれ者、大軍となる由、註進スル事櫛しのはを引か如し、懸る所に宇治勘七も帰りくれ者、右之次第ヲ聞シ召如水公以の外御怒り有テ、さらハ我出馬して大友ヲ一討亡し、殊ニ延引セハゆゝしき一大事と成り、其用意有所に、豊後国木附城ヨリ松井佐渡・有吉四郎右衛門、飛脚を立、急キ告けるに、既ニ大友義統、豊後国ニ入込て、一番ニ我レ〳〵居城取巻責立候処、二の丸まて責落され、漸ニ本丸相残、防戦ひ候間、何卒と早々御加勢を出され、後詰（ゴツメ）をなし下され候ハ、、勇々敷事ハ罷成申へしとそ、急き告来りけれハ、如水公聞シ召、扨てそ一大事とハ成難し、若、城を責落しぬらハ、弥敵軍威勢を振ハん事治定也、此上ハ九月九日ニ弥御馬出有へきとそ仰有ける、井上九郎右衛門・栗山四郎右衛門其外何茂申上けるハ、九日ハ悪日に相当り候間、日限御吟味有度よしを申上けれ者、如水公仰有けるハ、いや〳〵軍に善悪の日柄なしとそ被仰ける、則、九月九日御首途ト極りける、御祝義ヲ立給ひ自御着倒（チクトウ・ママ）を付られける、栗山四郎右衛門（後ニ備後ト号ス）一備、井上九郎右衛門（後ニ周防ト号ス）一備、毛利太兵衛（母室息有後ニ但馬ト号）一備、後藤大之助[46]・野村市右衛門（祐直）[47]一備、久野治右衛門（ママ・左）[48]・曽我部五郎右衛門[49]一備、黒田安太夫[50]・時枝長太夫（ママ・平カ）[51]・池ノ内次右衛門[52]・馬杉喜右衛門（一正）[53]一備、其外諸士備へ〳〵に都合其勢弐千五百余騎とそ着倒（ママ）にそ付給ひ[54]、夫々に仰渡されけるハ、扨も勇々敷備物かな、忠勤せらるへし、知行の諸士ハ軍巧（ママ・功カ）ニ依てハ加増の領地を遣し、又ハ足軽の者ともには、其巧（ママ）有るに依て武士ニ取立、感状ヲ給わりとの上意有、極々弥木附城後詰（ママ）簡断有へからす、石垣原こそくつきよふ（一風強）の戦場なれハ、騎馬のかけ引自由ならんと先陣・二陣に手配（テクハリ）ヲ定メられ次第を乱され、追々にそ打立ける、如水公ハ後陣に旗本勢を引くセられ、御旗本奉行之竹森清左衛門（ママ・新右衛門カ）[55]御拝印ハ四半之吹貫[56]風になひかしてこそうたセける、勇々敷こそ見江にけり、

石垣原合戦之事

一、如水公者、九月九日ニ中津城ヲ御出馬ヲ有りて、先一番に豊後国府（ママ）内城主竹中源助の籠りけるに、使者ヲ立給ひ仰遣されけるハ、既ニ先頃御約束の如く拙者儀出馬ヲ致して早々軍勢を出さるべしとそ申遣されハ、源助答て奉りける者、拙者事、頃日不快にて罷あり候間、保養ヲ加へ追付罷出越可申由なりと言けれ者、如水公殊の外御怒り有て、扨てそ源助心替りと相みへたり、軍陣の血祭りとして一番に源助か首ひつさけて然ルへきとて、頓而御旗ヲ府内方江押セらるゝ、竹中源助、是を見て、扨者一大事と成たり、此上者、人質を出すへし迚、子息主膳[57]を以、軍兵ヲ差添江遣しけれハ、如水公是を受取

給ひテ、又元の如くそ軍勢を引セける所ニ冨木城垣見和泉守の留主居垣見利右衛門[58]、城代として有けるか、城内ヨリ兵を出して如水公の通り給ふ往還ヲさへきりけれハ、栗山四郎右衛門一備にて暫く矢軍をなし追立(タテ)けれ者、こら江兼て城中にこそ逃けるを追付て敵之首を数多く取、川端ニごくもんにこそ掛置ヶれけるゝ、然ルに大友左兵衛尉(ママ)義統ハ豊後国江下向して旧恩の諸士我も〳〵と馳集り、頓而大軍とそ成りにける、然ル共、城地とてもなかりけれハ、先一番ニ木附城を責落して是に要害を構(カマエ)江根城となし、九州を平均すへしとて極り、軍大将ニ吉弘加兵衛幸(ママ・統等)[59]・宗像掃部(鎮続)[60]・都甲兵部[61]・(ママ・竹田カ)笛津志摩[62]・吉良伝右衛門(統茂)[63]等をむねとの士として都合其勢二千余騎[64]、木付城ヲ取巻責立けれハ、松井・有吉防戦ふといへとも、大軍なれハ荒(ママ)手ヲ入替〳〵責立、終ニ二の丸迄のり破られ、本丸ニてそさゝへけり、然ル処に如水公軍附後詰(ゴツメ)の為に出来ルよし聞へけれ者、吉弘嘉兵へ申けるハ、如水公者九州第一の名将にて、殊ニ大軍なれ者、中々此所にて戦う事然るへからす、石垣原者[65]竟(ママ)究之広野なれハ、此城は打捨置テ石垣原にそ出張して軍配を備へけり、此所立石[66]が一里余りなり、大友義統、立石と言所に小高き山に本陣を備江、家老田原紹忍ヲ引添へ旗本勢を引具セらるゝ、扨、如水公の先陣江者黒田安太夫・時枝長(ママ)太夫・池ノ内次右衛門軍勢を引卒(ママ)して石垣原江出馬ヲすゝめけれハ、大友方の吉弘嘉兵衛幸統(ママ)軍配を堅メ、宗像掃部・都甲兵部等ヲ初(ママ)メ右軍・左軍に備へける、軍兵ヲすゝめ騎馬をなして鯨波(トキノコエ)を合スル程てそあれ、矢種子をおします討立、鑓をひねりて相互にかゝり合しか、如水公さん〳〵にかけなやまされ、既ニ敗軍と見江けるに吉弘か手勢得たりや、かしこしと言まゝに左右ヨリ切て入れ者、討るゝ雑兵数を知らす、黒田・時枝・池ノ内薄手少々合て叶しとや思ひけん跡を見すして逃行けれハ、吉弘嘉兵衛下知して、永追無用と引退、元の陣場に備江ける、二陣久野次右衛門(ママ)、生歳十(ママ)歳の若武者、心剛にして勇猛人ニ者勝れけれ者、味方の先陣敗軍を見て、扨も浅間敷負軍かな、某軍巧ヲなし如水公の御感に預るへし、殊に先年高麗陣の時、野村市右衛門と拙者ハ長政公ノ先陣たるに数度軍配を争し事なれハ、野村も後陣に有る事なれ者、此節こそ我高麗(ママ)名を顕し先年之恥辱を雪へしと思ひけれは、[67]軍勢江下知ヲなしてかゝれ〳〵と言まゝに一番に馬を乗り出す所に、曽我部五右衛門、久野が馬ノくつわをとらへて、勇(ママ)メける、既ニ先陣敗軍仕り候、時ニ如水公被仰候事ハ、久野ハ若年なれとも殊の外心剛して武勇にさとしく、はやりの侍なれは、貴殿を此手の副将に添置間、随分勇軍ニ励へしとの上意なり、敵方の吉弘と申者ハ名有る勇士にして計り事人勝し、只今芝居にたむろふを仕る、必定計り事ありて伏兵所ニ多し、殊に味方ハ小勢也、敵は大軍なれハ、中々急戦有事然るへからす、追付三陣の井上も大軍にておし来り給わんなれハ、是を待受てこそ御合戦候てとそしきりに勇(ママ)しかとも、久野請に用ひすして、いや〳〵さわ有へからす、貴殿も続れよ、そふたい軍は勢の多少に寄るへからす、運に依而勝るに千里の外になセは、いかて後陣ニ大軍ヲ頼ミやミ〳〵と待居事、口惜き次第也、以て忠戦し敵味方の目を驚かして名を後に残すへしと、鞍を加江あヲり立〳〵敵軍間近くそ鑓をひねりてすゝみける、曽我部五右衛門、今ハ力に及ひ難し、騎馬を進メて勇ミけり、軍勢一同にかゝりけれハ、吉弘嘉兵衛、是を見て計り事を極メつゝ、わさと小勢ヲ随へて間近くなれハ、責戦ひテ、吉弘態と引退くを追つひて切て入る、吉弘又も取てかへして鑓を合セて戦しか、さつと引、久野計事と言事等夢にも知らす、敵先陣の戦ひニつかれたる者をしきりに追立〳〵馬けむりをなして名乗りかけ〳〵、吉弘目かけて責入る処に、後の谷ヨリ伏兵さつと起りて前後より取包む、久野、今者討死と心ヲ極メ、蜘手十文字に突てハかけ入〳〵、敵兵数多討取けれハ深手数ヶ所負ひ、弥吉弘目かけ突かくるに久野家来ハ今度俄ニ召抱し新参の者多かりけれ者、敵兵ニ切立られて叶はしとや思ひけん、行衛もしれす落失ける、普(ママ)代の士、命も惜します、大勢ノ中にかけ入れハ、此時久野は、吉弘か手にて三本鑓に突上ヶられて、あへなく石垣原の露と消けり、[68]曽我部五右衛門ハ敵兵を追立〳〵、勝にほこりける所ニ久野討死のよしを聞て、此上ハ生なからへて如水公ニ何に面目ニ御目見江をなすへし、思ひ定めて敵のむらかる中に突て入、能敵一両人討取て、終に討死致しけるそむさん也、吉弘は勝時を三度上させて、久野・曽我部か首立石の本陣に送り遣し、実検にそ備へける、然ル処に黒田家の三陣井上九郎右衛門尉之房・野村市右衛門(後ニ大学ト号ス)大軍を引卒(ママ)し、石垣原江来けるに最早軍も始り、先陣は敗軍して二陣久野・曽我部も討死し刻なれ者、井上九郎右衛門、野村市右衛門に向ひて申しけるハ、敵ハ名有勇士なれは、計り事甚勝たり、是此度の一戦ノ分目と覚ゆるなれハ、我(ママ・レカ)ル計り事ヲ廻らして吉弘ヲ討取へし、幸、向ふに丸山の有れ者、是を小立と取て勝負ヲ決(ケツ)すへし、必はやり返たる事然ルへからす、我下知を用ゆへしと士卒(ソツ)に触させて、頓而丸山に来り小立に取て芝居をなして敵のかゝるを待かけたり、然る処に大友方ノ吉弘嘉兵衛一備、宗像掃部一備と引分〳〵ニ備を致して木附ノ城の松井佐渡・有吉四郎右衛門も木附の城の敵、石垣原に出テける故ニ、手勢少々城ニ残し置て石垣原江来りけり、井上に対(クイ)面して一手に備江ける、井上も野村も二手に備へテ致すに、大友方の吉弘嘉兵衛、軍配をなして鯨波(トキノコエ)をとふと上ヶさせ旗印ヲ風になひかして井上か手に渡り逢、矢種をおします討違て、騎馬をすゝめ鑓をひねりて暫く之(ママ)戦しか、吉弘何とか思ひけん、さつと馬を引退ニ、井上も士卒ニ下知をなして、永追セすと元の芝居に馬を息を休メ扣へたり、又も吉弘とつてかへし、暫く戦ひしかとも、勝負も慥ニわかちなけれハ、又も吉弘嘉兵衛引退く、然とも井上別して永追セされハ、吉弘方先刻ヨリノ戦に労れし士卒多かりけれハ、計り事も成就セすあらん果てそ居たりける、元ヨリ井上ハ荒(ママ)手なる上、計り事廻らしける故に手勢に

討死も少なかりける、吉弘今たまり兼、此上ハ自井上に出合て勝負を決し名を末代に残すらんと思ひ定メ、二手の備を一手に致し只一戦と極メつゝ鯨波をしきりに上させ、矢行違る有様ハ雨の如し、井上も今そはれの勝負ごさんなれと言うまゝに士卒に下知をして、大太刀つはもとより火を出し鑓のほ先ハ朱（シ）をそき、死骸ハ広野にたんを見出し草葉者紅をなして今を最期と責戦、既に乱軍となりにける所に吉弘嘉兵衛尉幸統（ママ）と名乗かけて、井上目掛騎馬をすゝめけるに、少し小河の流れける所に井上ニ出合ける時、加兵衛声ヲかけて申けるハ、井上殿珍敷し、先年高麗陣の時、肥前国名古屋（ママ）ニて対面致し、今敵味方となりて再会仕候事何ヨリ以て大慶ニ候、然る上者武士の本意、只一せんに勝負ヲ決し申さんと言けれハ、井上も珍敷御見参にて候者かな、吉弘殿ハ名を得し勇士なれハ、いて鎌鑓心見をなし給へと言うまゝに騎馬をおとらせて互に鑓をひねりて丸山を小立ニ取て追すかひし、丸山を廻りに懸りけるに、初（ママ）の程は井上追われて危（アヨ）ふく見江しか、いかゝしたりけん、井上跡に成りて吉弘を目懸け追立しに、吉弘も取て帰して鑓を合セしに、吉弘か鑓ハはつれしに、井上か鑓先、吉弘かほゝふ先に突立しに血塩（ママ）流れて見へけるに、吉弘いかニ思ひけん、此手を捨て野村市右衛門か備を目かけ掛入らんとしたりける処に打立て首を取らんとセし処に、吉弘か家人ともかけへタテ戦ける故に、此者一人突伏ける故に吉弘かのかれける、爰に小栗次右衛門[69]と言者ありて、吉弘と見る故ニ中さしの矢を引しぼりてつる音高ク切てはなせハ、あやまたす吉弘嘉兵衛尉か胸板を射通しけれハ、馬よりまつさか様ニ落て息きれけれは、其首を討取て本陣江こそ引退く、[70]宗像掃部ハ野村市右衛門か備に責入、火花を散らして戦ひけるニ、野村は武巧の者なれ者、敵兵数多討留メ追立〳〵責立けれハ、討るゝ敵兵数を知らす、宗像掃部も是迄と言まゝに野村ヲ目掛て突てかゝる所に大野勘右衛門[71]得たりやかしこと言侭に暫く鑓を合セつゝ、いさ組留メんと互に馬をかけ寄、馬上ニむんすと組合て、ゑいや〳〵と押合しか、たかひにあふみ（ママ）ふ（ママ）踏はなし両馬かあいにとふと落、上に成り下ニなり力量今を盛んとミ江しか、終に宗像掃部力やまさりけん、大野勘右衛門を組敷て腰刀をぬきはなし、既ニ首をかゝんとする所ニ勘右衛門か弟大野休（ママ・久弥）也[72]と言者、兄の討るゝを見て救（すく）わんと思ひ懸来りて、後ヨリ太刀ふり上て宗像掃部か首を□（判読不能）□たまさす打落しける故に、勘右衛門（ママ・虎カ）疫口の難をのかれて助りける、[73]都甲兵部・笛（ママ）津志摩・吉良伝右衛門何れも大友ニて名を得し勇士とも強く（ツヨク）戦ひて討死しけれハ、雑兵とも大将討れて今者叶わしとや思ひけん、思ひ〳〵に落失けり、又ハ甲冑を抜て如水江降参する者数多知らす、井上・野村ハ勝時を作りかけ〳〵元の陣場江そ引退く、

実相寺山ニ而首実検之事

一、如水公は頭成[74]と言所に御籏勢を引具セられて真先に四半の吹貫押立させ、石垣原江そ出給ふ所に、向ふの方より早打ニ来りて井上か書札を捧け、石垣原御勝利の事共を言上ス、如水公殊の外御機嫌勝れ給ひ、頓而石垣原ノこなたに実相寺山[75]ニ本陣をそす江られけれハ、井上九郎右衛門ヲ初（ママ）メとして諸士残らす御目見江仕りて首実検をなし給ふ、軍巧のしうゆれつを但（ママ）し給ふに、松井・有吉も御目見江に出ける、扨小栗次郎右衛門、吉弘か首を持参して御実検ニ備へ奉るニ井上申けるハ、其首ハ拙者鑓疵（キヅ）ヲ致し置たり、ほう先に鎌鑓の有りしと申けれハ、改メ御覧ニ備奉ニ、はたして其疵跡ありける故に、如水公殊の外御感心有之、井上は鑓付、小栗は首ヲ取りしと安納に御感状ヲ出されける、野村か手ヨリ宗像掃部か首を献スるニ是又御感状ヲ出され、其外宗徒[76]ノ首を数多実検ニ備へ奉るに吉良伝右衛門か首は見江さりけれハ、御上意あるに、伝右衛門ハ大友にて名を得し物（ママ）なるか何に故に首はなきや、いまた存命なるかと御尋有ける所に、一人生捕レの者とも是を聞て、いや〳〵伝右衛門は武巧数多の者にして中々臆す者ニ候わす、必定討死したるニ候へし、其者ハ殊の外みにくき姿にて候得ハ、自害をなし首を隠したるに違イなしと申ける処に、末坐有ル大塩喜平次と言も〇（キ）の者、追々出て申けるハ、私義昨日の戦ひに手ひとく戦ひて勇士を討取候得しニ、首を能く見候に殊の外うるさき首にて候間、竹薮の中に捨置候、追付取て帰るへしとて御前を立て、頓而持参致けるヲ能く御覧有に弥々吉良伝右衛門か首なりけれハ、殊の外御感状にそ預りける、[77]毛利太兵衛ハ平伏て有けれハ、松井・有吉の両人、詞を揃へ申けるハ、太兵衛殿ニハ昨日之合戦ニ御聟の久野殿討死し給ひ嘸々（さぞ）御しうたん被成候へし、然とも御甥ノ野村市右衛門殿はつくんの高名をなしたまへハ御喜悦有ルへしと申けれハ、太兵衛も挨拶致しける所に、如水公聞召、暫く久野か事を御しうたん有之、誠に武士ノならい、是非なき次第也迚、其弟を召出され久野外記（重時）と名を改メ家督（カトク）相続の被仰付ける、又、松井・有吉両人か忠戦之次第を井上か一々言上致しけれハ、如水公殊の外御感心有て御感（ママ・伏カ）を出されて細川忠興の戦巧を者申送ヨリ給けると面目なれと誉ぬ人はなかりける、如水公、毛利太兵衛ニ仰られける者、大友左兵衛尉（ママ）事、立石の要害に籠るよし、是は力量（ママ）に致し候事人馬のそんしも多かりぬれ者、兎角計り事をなして降参さするにしくは有ルましと被仰付けれ者、太兵衛畏り奉りて、頓而御前を立て我陣所江そ帰りける、太兵衛は初（ママ）より立石の要害をこなたなる所に陣家（カマヘ）を構江て此手を待受けれハ、早々飛脚を立テ立石の要害江申入ける者、此度大友殿御先陣敗軍ニ付、宗徒の勇士大半味方ニ討取候、今ハかうよと相見江申候、早々如水公江降参し給わ者、内府江能々申なため、悪くは計らい候ましとて申入け

れ者、大友左兵衛、家臣共を召集メ、いかゝすへきやと評儀まち〳〵也、壱人進ミ出て申けるハ、如水公ヨリ申来り候事、是者計り事候ヘし、若、御降参候ハヽ、御後悔必定ならん、然ル上ハ一両日も此要害の地に楯籠り、遠矢にて防き給はハ、其内ニハ近国の味方ヨリ御加勢申へし、又中国の毛利氏ヨリ必定御加勢有けれ者、運に任セ一両日も持こたへ給を事、御先祖に（ママ）戦（ママ：対カ）し奉り武士の本意ニ候わん、其上御旗本の数多当所ニ残りあり候上は、弥武運に任セ、若討負給わハ御自害有りて先祖の深恩を報し給ふへしとそ勇（ママ）けれ者、家老田原紹忍進ミ出て申けるハ、申奉るゝ処至極尤に者聞へ候得とも、当世の英勇の将、殊ニ大軍なれハ、中々敵戦叶難し、幸に申越るゝ事なれは、ひたすらに御降参然るへしと、拙者は中河（ママ）修理太夫（秀成）[78]を頼ミ彼方江罷越、命を助り申へしと申けれ者、愚将なる左兵衛へ（ママ）なれとも、弥然るへしとそ降参に極りける運の程こそ哀れなり、[79]

1　北九州市八幡西区生涯学習センター郷土資料室所蔵。縦二四・四㎝、横一五・四㎝の竪帳。墨付三七丁。

2　註19参照。

3　「常山紀談」は江戸時代の武将論随筆。湯浅常山著。二五巻、拾遺四巻、付録（『雨夜燈』）一巻全三十冊。元文四（一七三九）年自序。明和四（一七六七）年松崎観海序。明和七年赤松蘭室跋。付録明和八年赤松蘭室跋。戦国時代末より近世初頭の将士に関する史談四七〇条を収録し、上杉・織田・徳川などの諸侯とその家臣たちの言行を記す。話題を選び、真実の真偽をよく弁別論述している。平明暢達、雄健な和文で格調が高い。著者は備前岡山藩士で、江戸で服部南郭に学び、太宰春台とも親しかった。江戸時代から広く読まれ、無刊記本、木活字本、明和八年版、弘化三（一八四六）年・同四年版、嘉永四（一八五一）年刊拾遺四冊との合冊版などがある（水田紀久分担執筆「常山紀談」〔『国史大辞典』〕）。

4　中野好夫氏によると、すぐれた伝記とは次のようなものであろうとされる。すなわち、一つには書こうとする人物に対して書く側が、たとえ嫌いな人間でも、とにかくこの人物は面白いと、愛着みたいなものがなければならない。もう一つは作者が表向きの行動だけでなく思いもよらない部分に光を当てて書かれたもの、その人のあまりよく知られていない逸話が掘り出され、それに注目されているということ、と述べられている（中野好夫『伝記文学の面白さ』（一九九五年、岩波書店）六一頁。

5　川添昭二・福岡古文書を読む会編『新訂黒田家譜第一巻』（一九八三年、文献出版）四一一～四一二頁。

6　日下力氏は「父子・母子はもちろん、男女も兄弟も、強い愛のきずなで結ばれていたのだと、過去の人々について語ろうとする志向性を持つのが、軍記物語であったと言っていい。」とされる（日下力『いくさ物語の世界――中世軍記文学を読む』（二〇〇八年、岩波書店）一七二頁）。

7　註5前掲書四一〇頁。

8　笹川氏によると、少し時間が経ち、精神的に余裕が出てくると、あったことに対して批判をしたり批評をしたり、感想を述べる時期がやってくる。それから、その事件は作者にとって一つの材料に過ぎなくて、作者に何か言いたいことがあって、その材料としていろいろな出来事を使う、という時代がやってくる、とされる（笹川祥生「近世の軍書―近江の戦国時代を描いた作品を例として―」〔『軍記物語とその劇化―『平家物語』から『太閤記』まで―』、二〇〇〇年、臨川書店）五四頁）。

9　岡田武彦監修『西日本人物誌［1］　貝原益軒』（一九九三年、西日本新聞社）には、「黒田家譜」について「文体は軍記物に似ている。それは（貝原益軒が　筆者註）幼少から『平家物語』『太平記』『保元物語』『平治物語』など、わが国の軍記物を読んでいることによる。しかも、あくまで史実を厳密に検討し正確を期している。」とある（同書一五七頁）。

10　「実録体小説」とは、中村幸彦氏によると、史実を虚構し、様々な事件を附加したもの（一頁）、仇討、武勇伝、世話咄、妖怪談などを含むもの（二頁）、諸事件が実話の通りに、又は多分に粧飾されるもの（七・八頁）、のようである（中村幸彦「実録体小説黒田騒動の成立」〔『九州文化史研究所紀要』第一二号、一九六七年、九州大学九州文化史研究施設〕）。

11　「箱崎釜破故」については石瀧豊美氏が開設されている「イシタキ人権学研究所ホームページ」（http://www5e.biglobe.ne.jp/~isitaki/index.html）を参照していただきたい。石瀧氏は、「箱崎釜破故」の作者は福岡藩士ではあろうとされる。

12　御老中は「五人のしゆ（衆）」（五大老）を指す。すなわち徳川家康・前田利家・毛利輝元・上杉景勝・宇喜多秀家のことである（『大日本古文書　家わけ第八　毛利家文書之三』（一九二二年、東京帝国大学文学部史料編纂掛）九六〇号文書。二四三・二四四頁）。

13　「御後見として東国三拾三ヶ国ヲ徳河内府家康公ニ御預ヶ有り」ということは管見の限り他の史料からは見出せない。また笠谷和比古氏は、「自らの死期の近いことを悟った秀吉は五大老・五奉行から誓詞を徴して、秀頼への忠誠と私党による権力闘争の禁止とを誓約せしめた。さらに前田利家には大坂城にあって秀頼の後見をなすことを託すとともに、家康には伏見にとどまって公儀の政務を司ることを要請し、実力者たちの勢力均衡を図ることで、秀吉没後の政治の安定に意を用いた」とされる（『関ヶ原合戦と近世の国制』（二〇〇〇年、思文閣出版）二七頁）。

14　毛利輝元は文禄四（一五九五）年正月従三位中納言となっている（『新訂寛政重修諸家譜　第十』二四二～二四五頁）。当時の毛利宰相（参議の唐名）とは輝元の養子、毛利秀元のことである（同二五一～二五五頁）。

15　島津義久は永禄七（一五六四）年三月十四日、正五位下修理大夫となり、天正九（一五八一）年五月三日、従四位下に昇る。天正十四年、秀吉に降伏後、入道して龍伯と号し、そののち三位法印に叙せられる（『寛政譜　第二』三三三～三三五頁）。義久の弟、義弘が兵庫頭を称していた（同三三六～三三九頁）。

16　立花宗茂は初名宗虎で数度改名している。官途は天正十五（一五八七）年七月二日、従四位下侍従、左近将監となる。飛騨守となるのは元和八（一六二二）年十二月二十七日である（三七〇～三七二頁）。このことからも「石垣原合戦記」が後年編まれたことが分かる。

17　垣見和泉守（？―一六〇〇）は実名一直。文禄三（一五九四）年豊後国東郡富来城主となる。関ヶ原の戦には西軍に党して伏見城攻の攻撃に参加、さらに近江瀬田城を守備し、ついで石田三成・小西行長の軍に属して美濃大垣に進出、九月十四日、福原長堯・相良頼房（長毎）・高橋元種・秋月種長・熊谷直盛・木村総右衛門と大垣城を守り、一直は直盛・総右衛門とともに二ノ丸に拠った。しかし変心して東軍に応じた三ノ丸の頼房・元種・種長のために十八日の早朝（一説に十七日）誘殺された（岩沢愿彦分担執筆「垣見一直」〔『国史大辞典』〕）。黒田如水が攻めた城の城主であったことから西軍の有力武将でないにも関わらずその名がここで挙げられていると推測される。

18　熊谷内蔵之丞（内蔵允。（？―一六〇〇）は実名直盛。豊後国安岐城主。関ヶ原の戦では西軍に与し、八月二十五日、兵四百五人を率いて守備していた近江勢多橋から美濃大垣城に入り、二ノ丸を守ったが、同城三ノ丸守将相良頼房（長毎）らの裏切りにあい、九月十七日、三ノ丸西の門口で殺された。彼は出自が明らかでないが、資性勇猛、また石田三成の女婿であったともいう（染谷光広分担執筆「熊谷直盛」〔『国史大辞典』〕）。

19　上杉景勝は天正四（一五七六）年正月十一日、弾正少弼と称す。一説に弾正大弼とも。文禄三（一五九四）年八月十八日、従三位中納言に叙位任官。（『寛政譜　第十二』二一九～二二一頁）。よって、慶長五（一六〇〇）年当時は、弾正大弼ではなく中納言と呼ばれていたはずである。また、江戸期米沢藩上杉家の藩主で官名が弾正大弼であるのは四代藩主綱憲以降である。綱憲が弾正大弼に任官されるのは延宝三（一六七五）年十一月二十三日である（同二一二・二二三頁）。このことは「石垣原合戦記」成立時期を推定する手がかりとなる。

20　濃州青青野原（あおのがはら）は現岐阜県大垣市。市の北西端青野町を中心に、東の青墓町から西の現不破郡垂井町府中にかけて比定される野原。慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の合戦に際しては、徳川家康の着陣をうけて、東軍の先陣が青野原に進出したことが知られる（年欠「吉川広家書状案」吉川家文書九一三号文書〔『大日本古文書　家わけ第九　吉川家文書之二』、一九二六年、東京帝国大学文学部史料編纂掛〕六四～七〇頁）（『日本歴史地名大系二一　岐阜県の地名』（一九八九年、平凡社）二七四頁）。

21　前田利家は慶長四（一五九九）年閏三月三日に没している（『寛政譜　第十七』二六九～二七二頁）。利家嫡男の利長は慶長二年九月参議、同三年四月二十日従三位中納言に叙任されているが、大納言には任官されていない。慶長十九年五月二十日に没した後、正二位大納言を追贈されている（同二七二～二七四頁）。

22　彦根藩主井伊家当主の官途は代々掃部頭であるが、関ヶ原合戦に参加した井伊直政の名乗りは兵部少輔である（註21前掲書二八七～二九二頁）。直政の跡を継いだ直孝は慶長十（一六〇五）年四月十六日掃部助、同十五年掃部頭（同二九二～二九六頁）。

23　本多姓で関ヶ原合戦に参戦したのは本多忠勝であるが、忠勝は天正十六（一五八八）年四月に従五位下中務大輔に叙任されており（『寛政譜　第十』二一四頁）、忠勝の子孫政長以降の本多家当主官途は代々中務大輔である（同二一七～二二四頁）。

24　関ヶ原合戦時、酒井氏に雅楽頭を名乗る人物はいない。徳川氏に仕えた酒井氏には左衛門尉酒井氏・雅楽頭酒井氏の両系があるが（北島正元分担執筆「酒井氏」〔『国史大辞典』〕）、当時の雅楽頭酒井氏当主重忠は従五位下河内守（『寛政譜　第二』二・三頁）、その子忠世は慶長十二（一六〇七）年雅楽頭となるものの、関ヶ原合戦時は従五位下右兵衛大夫であった（同三～五頁）。

25　小笠原姓で兵部を名乗った人物で、慶長五（一六〇〇）年段階で存命なのは、小笠原秀政しかいない。しかし、秀政が兵部大輔に任官されるのは慶長十一（一六〇六）年二月五日のことである（『寛政譜　第三』三九二頁）。秀政の子孫では、小笠原長安（同三九五頁）、小倉藩主小笠原忠総が名乗っている。忠総が兵部大輔に任官されるのは安永四（一七七五）年二月五日である（同三九八頁）。

26　関ヶ原合戦に東軍方として参戦した主要な武将のなかに田川姓の人物は管見の限りいない。官途から田中吉政あるいは細川幽斎（藤孝）が考えられるが、後者の幽斎は天正十三（一五八五）年十月六日二位法印に叙せられているので（註24前掲書二九六～三〇〇頁）、前者の田中吉政のことであろう。吉政は天正十六（一五八八）年三月十七日従五位下兵部大輔に叙任されている（『寛政譜　第二十』三四六・三四七頁）。

27　大久保忠隣の嫡子忠常は慶長五（一六〇〇）年に従五位下加賀守に叙任されるが、それが関ヶ原の前後何れかは不明である（『寛政譜　第十一』三八一・三八二頁）。

28　伊達政宗は慶長二（一五九七）年冬従四位下少将、慶長十三（一六〇八）年正月陸奥守となっている（『寛政譜　第十二』三二一～三三〇頁）。

29　奥平藤兵衛貞治。奥平貞勝の三男。はじめ秀吉に仕え、慶長五（一六〇〇）年家康が上杉景勝征伐を行った時、付き従い小山に着陣。関ヶ原合戦にも供奉する。小早川秀秋の内応の状況をうかがうため、九月十四日、子の五兵衛重盛とともに秀秋の松尾山の陣に赴き、貞治は同陣に留まる。九月十五日の本戦で大谷吉継・平塚為広の軍勢と戦い、討死（『寛政譜　第九』二〇八頁）。

30　伊勢津藩藤堂家当主は二代高次以降大学頭を名乗る場合もあるが、関ヶ原に参戦した藩祖高虎は天正十五（一五八七）年五月四日に従五位下佐渡守に叙任され、慶長十一（一六〇六）年九月十五日和泉守と改めるが大学頭は名乗ってはいない（『寛政譜　第十四』二八三～二九三頁）。

31　安藤直次は関ヶ原合戦に参加しているが、帯刀を名乗るのは慶長十（一六〇五）年正月十日のことである（『寛政譜　第十七』一六九～一七一頁）。

32　成瀬正成は関ヶ原合戦に参加しているが、隼人正を名乗るのは慶長十二（一六〇七）年閏四月のことである（『寛政譜　第十五』一三三～一三五頁）。

33　吉田宮内は元和期（一六一五～一六二四）知行千三百石（福岡地方史研究会編『福岡藩分限帳集成』（一九九九年、海鳥社）二二・二三頁）。

34　細川ガラシャ夫人の最期について「綿考輯録」には次のように記されている。「扨は心にかゝる事なし、少斎介錯仕候得と被仰候、畏候とて長刀をさけ老女を先に立て参りけれハ、御髪を御手つから上へきりきりと巻上させ給へハ、少斎左様にてハ無御座候と申上けれハ、心得たりとて御胸の所を両方江くハつと押ひらき給ふ、少斎敷居をへたてゝ居候ひしが、御座の間江入候事憚多候得は、今少こなたへ御出被遊候得と申上けれハ、則敷居江ちかき畳に居直らせ給へハ、長刀にて御胸元をつき通し奉り候、」と（石田晴男・今谷明・土田将雄編『綿考輯録　第二巻』（一九八八年、汲古書院）二一三頁）。すなわち、ガラシャ夫人はキリシタンであったため戒律上自殺をするとは考えられず、「綿考輯録」からも推断される。

35　宮崎織部安尚（？―一六三一）は筑前入国後二千五百石を拝領（本山一城『黒田軍団　如水・長政と二十四騎の牛角武者たち』〔二〇〇八年、宮帯出版社〕一七二頁）。

36　福岡藩の慶長期船手衆に松本主殿（七百石）がいるが（註33前掲書一二頁）、この人物が孫七郎と同一かは分からないが、少なくとも同族の人物ではあると推測される。

37　耳川は現宮崎県東臼杵郡にあり、戦国時代は細島（現日向市）とともに日向国の要港の一つであった。とくに島津氏は瀬戸内海へ出る重要な港湾として利用した。戦国期末、日向国は伊東氏を支援する大友氏と南から進出した島津氏の勢力に二分されていく。天正五（一五七七）年伊東義祐は島津氏によって日向を追われ大友氏を頼ったため、翌六年には大友宗麟は日向に侵入し臼杵郡を掌握した。大友軍は十月には耳川を越えて島津方の守る新納院高城（現木城町）を包囲したが落すことはできなかった。十一月には大友軍の主力と島津軍の主力が耳川から高城にかけての一帯で激突することになった。同月十一～十二日の高城・耳川合戦で大友軍は殲滅され、多くの武将を失い、小丸（おまる）川から耳川に退却する大友軍は島津軍に追撃され、一帯は大友軍将兵の死体で埋尽されたという（『日本歴史地名大系四六　宮崎県の地名』〔一九九七年、平凡社〕八九頁）。また、天正十五（一五八七）年、秀吉の九州出兵においても戦場となっている。すなわち同年四月十日のことである。もっともこの合戦において功名をあげたのは長政である（『新訂黒田家譜第一巻』〔一九八三年、文献出版〕一三七～一四三頁）。

38　豊後府内城は大分市荷揚（にあげ）町にあった城。大分城、荷揚城、雉（ち）城、白雉城とも称す。平城。慶長二（一五九七）年福原直高が臼杵六万石から、豊後国大分・速見・玖珠郡内で十二万石を充行われて、新城の築造を企画。慶長四（一五九九）年四月には城郭および侍屋敷のおかれた三ノ丸部分がほぼ完成し、福原は入城し、荷落（におろし）の名を改め荷揚城とした。しかし、福原は同年五月改易となり、先代の藩主であった早川長敏が入城するが、関ヶ原の戦で除封。同六年豊後国国東郡高田城主であった竹中重利（重隆）が入封した（豊田寛三分担執筆「府内城」〔『国史大辞典』〕）。作者は慶長五年段階の府内城主早川氏を後の城主である竹中氏と混同したようである。また、関ヶ原合戦前後、竹中源助（伊豆守重信〔重利・重隆・隆重ともいう〕）は上方にいて、高田城にはその子采女正重次（重義・重興・重矩ともいう）が在城していた（註37『新訂黒田家譜第一巻』四〇〇頁、『大分県史　近世篇Ⅱ』〔一九八五年、大分県〕四・五頁）。

39　咸陽宮の故事の出典は不明である。平家物語巻五に咸陽宮の段があるが、そもそも咸陽宮とは中国、秦の始皇帝が首都咸陽に建設した壮大な宮殿である。咸陽宮の堅牢さは次のように記されている。「咸陽宮は、みやこのめぐり一万八千三百八十里につもれり。内裏をば地より三里たかく築あげて、其上に建てたり。長生殿・不老門あり。金をもッて日を作り、銀をもって月を作れり。真珠のいさご・瑠璃の沙・金の砂をしきみてり。四方にはたかさ四十丈の鉄の築地をつき、殿の上にも同く鉄の網をぞ張たりける。これは冥途の使をいれじとなり。秋の田のもの雁、春はこしぢへ帰も飛行自在のさはりあれば、築地には雁門となづけて鉄の門をあけてぞ通しける。」（『新日本古典文学大系四四　平家物語　上』〔一九九一年、岩波書店〕二八五頁）と。

40　宇治勘七は「黒田家譜」にもその名を見出すことができるが、詳細不明である。同書の勘七に関する記述は次の通りである。「大友下向の事はやく中津川へ聞えければ、如水此度大友を誘引して、身方にせんため、家人宇治勘七といふ者に、大神（おほが）大学と云浪人を添て、周防国上の関へ遣しおかる。」と（註37『新訂黒田家譜第一巻』三九六頁）。

41　現上関町大字長島（ながしま）。熊毛半島の先端、西海上に位置し、東北から南西に長い島（『日本歴史地名大系三六　山口県の地名』、一九八〇年、平凡社。一六一・一六二頁）。

42　秀吉は文禄二（一五九三）年五月朔日付で、豊後の大友義統と島津一門の島津忠辰、および肥前の波多親らを改易処分とした。中野等氏は次のように述べられている。「明のほうから「侘び言」を申し出てきたというレトリックによりつつ、当初の派兵目的であった「征明」が果たせなかったことの意味は大きい。政権としては、どこかにその責めを負わせる必要があったのである。」と（中野等『秀吉の軍令と大陸侵攻』〔二〇〇六年、吉川弘文館〕一九五・一九六頁）。この改易処分に石田三成が関わっていたかは不明である。

43　（文禄二＝一五九三年）五月朔日付毛利輝元宛豊臣秀吉朱印状に「今度大友事、於平安表伝城明退、臆病を相構ニ付て、則可被加御成敗候へ共、命を助、国を被召上候、然者大友事、四五人之躰にて其方へ被為預ヶ置候間、可被抱置候、」とある（『大日本古文書家わけ第八　毛利家文書之三』〔一九二二年、東京帝国大学文学部史料編纂掛〕一五六・一五七頁）。

44　「黒田家譜」には「馬百足・具足百領・長柄の鎗百本・鉄砲三百挺・銀子三千枚」とある（註37『新訂黒田家譜第一巻』三九五頁）。

45　この部分からもこの「石垣原合戦記」に如水、あるいは黒田家を賞賛する意図があることは明白である。

46　後藤大之助とあるが、この人物は後藤又兵衛基次の長男太郎助（左門）のことと推測される。綿谷雪氏によると石垣原合戦時、推定年齢二十二から二十九歳であった（綿谷雪『実録後藤又兵衛』〔一九八一年、中央公論社〕七九頁）。

47　野村市右衛門祐直は天正九（一五八一）年播磨国姫路に生まれる。父は野村太郎兵衛祐勝。大学、隼人と称する。慶長の役に十七歳で出陣、数々の武功を立てる。筑前入国後知行六千石を領す。寛永八（一六三一）年八月四日、嘉麻郡鯰田村にて没する。行年五十一歳（益軒会編『益軒全集巻之五』〔一九七三年、国書刊行会〕五六八・五六九頁）。

48　久野次左衛門は久野四兵衛の嫡子、久野二右衛門重時（玄蕃・外記）の兄。母里太兵衛友信の婿。朝鮮の陣で野村市右衛門と功名争いに敗れ、その遺恨により常に市右衛門と武功を争ったという（註47前掲書五六五・五六七頁）。

49　曽我部五郎右衛門は黒川甲斐守の嫡子。父美濃守は伊予松山城主であったが、秀吉に滅ぼされ浪人となる。二十三歳の時、如水に仕官。采地二千石を与えられる。黒の字を避けて母方の曽我部姓を名乗る。生来武勇の人であったという。行年三十八歳（註37『新訂黒田家譜第一巻』四〇八頁）。

50　黒田安太夫は豊前宇佐城主宮成吉右衛門の嫡子。朝鮮の陣で活躍する（註37『新訂黒田家譜第一巻』二八九頁）。

51　時枝平太夫は慶長期知行三千石（福岡地方史研究会編『福岡藩分限帳集成』〔一九九九年、海鳥社〕四頁）。

52　池ノ内次右衛門については詳細不明である。

53　馬杉喜右衛門一正はその父を薩摩といい、その祖父は監物という。先祖代々近江の者で佐々木（六角）氏の家臣であった。喜右衛門は弘治元（一五五五）年近江国勢田に生まれる。永禄十（一五六七）年八月、佐々木義弼（六角義治）が将軍足利義昭を暗殺しようとした時、十三歳で初陣を果たす。天正十八（一五九〇）年、秀吉の小田原攻め、相模山中城合戦の時、喜右衛門は一柳伊豆守直末に仕えて旗奉行であったが、直末は同合戦で戦死した。直末は如水の妹婿であり、その子松寿丸は如水の甥にあたり幼少であったため、如水に引き取られ養育された。その時喜右衛門も松寿丸に随い如水のもとに来ることとなった。朝鮮陣で長政に従って渡海し、武功を上げた。特に晋州城の戦いで黒田家において二番乗りを果たす。筑前入国後は千石を与えられる。寛永十四（一六三七）年、八十三歳で病死（註47前掲書六〇七・六〇八頁）。

54　「黒田家譜」によると、九月九日中津城を出陣した総勢は八千余人とある（註37『新訂黒田家譜第一巻』三九八頁）。「石垣原合戦記」において黒田勢を少なく記しているのは、如水が戦上手であることを強調するための作為とも推測される。

55　竹森清左衛門貞幸は竹森新右衛門次貞（石見）の嫡男である。天正六（一五七八）年播磨国姫路に生まれる。幼名少助。慶長二（一五九七）年、慶長の役で初陣を果たす。その後喧嘩沙汰を起こし長政の怒りをかい、父次貞から勘当される。慶長五（一六〇〇）年、故郷の姫路に帰っていたが、長政が家康方に属して戦うことを聞き、関ヶ原の長政の陣に加わり、その戦功著しいものであったため、帰参を許された。普請の才能があり、江戸・大坂城の天下普請のおりは黒田家の普請役差配を長政・忠之から任された。島原の乱にも参戦し、慶安二（一六四九）年三月十日病で没する。行年七十一歳（註47前掲書五九六・五九七頁）。竹森姓で清右衛門を名乗ったのは管見の限り彼一人である。このことから清右衛門貞幸の在世時に「石垣原合戦記」は編まれたのではないかと考えられる。また、以上述べたように貞幸は石垣原合戦には参加しておらず、勘当中であり、美濃関ヶ原の長政勢に加わっていた。よって清右衛門ではなく父の新右衛門の誤りであろう。新右衛門は天正十（一五八二）年の山崎合戦から旗奉行とされ、関ヶ原合戦では次貞五十一歳、老年であったため、毛屋主水が黒田家の中白の旗十二流のうち六流を主水が支配して長政に随い、残り六流を新右衛門が支配して如水の供をしたという（同五九五・五九六頁）。

56　吹貫（吹抜）とは旗の一種で、吹流しに似て、切り裂いた長い布の口をまるく輪にして竿につけたもの。戦国時代末期から軍陣で用いた。福岡市博物館には福岡藩士三奈木黒田家に伝来した黒田家の大馬幟が収蔵されている（黒田長政と二十四騎展実行委員会編『黒田長政と二十四騎　黒田武士の世界』（二〇〇八年、福岡市博物館）七九頁）。

57　竹中重義については八百啓介氏の論考がある（八百啓介「長崎奉行竹中重義について―近世初期外交政策に関する一考察―」（『九州史学』第八〇号、一九八四年、九州史学研究会））。

58　垣見理右衛門は垣見和泉守一直の兄。一直が美濃国大垣に出陣していたため理右衛門が藤井九左衛門（和泉守夫人の弟）らとともに城を守っていた（註37『新訂黒田家譜第一巻』四〇二頁）。

59　吉弘加兵衛統幸の先祖は大友一族で、代々大友家の先陣を務めたという。祖父も父も加兵衛を称した。父は宗甚と号し、高橋紹運の兄である。そのため統幸は紹運の甥にあたり、立花宗茂は従兄弟である（註37『新訂黒田家譜第一巻』四一三頁）。

60　宗像掃部鎮続は義統の側近。大友氏改易後、岡城主の中川氏に仕える。義統の決起にともない、大友軍に加わる（『週刊新説戦乱の日本史二五　九州の関ヶ原』（二〇〇八年、小学館）二九頁）。

61　都甲兵部については詳細不明である。

62　竹田津志摩入道は大友軍の物頭。浪々中の主君義統に近侍したという（註60前掲書同頁）。

63　吉良伝右衛門統栄は義統の側近。大友氏改易後も義統に近侍していたという（註60前掲書同頁）。

64　大友勢の数については正確なところは定かではない。

65　石垣原の絵図が三奈木黒田家文書のうちに残されている（九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵「三奈木黒田家文書」三五五三）。この絵図は江戸期に作成されたものである。石垣原の「吉弘嘉兵衛（統幸）墓、下馬松ト云」という場所について、「以前者此所ヲ騎馬ニテ難通様ニ往還ニ松横タエ有シニ其松枯テ後、トベラ之木亦以前之松ノ如シ」とある。トベラの木とは、トベラ科の常緑低木で、関東以西の本州、四国、九州の海岸に生える木である。

66　現大分県別府市。鶴見岳の東麓、石垣原扇状地と朝見川の断層崖上に立地し、東は別府村（『日本歴史地名大系四五　大分県の地名』（一九九五年、平凡社）四七五頁）。

67　註48参照。「黒田家譜」の注記にも「此度（石垣原合戦　筆者注）も隼人（野村市右衛門）にまさらんとおもふ下意有て、かくのことく諸人に越て動きけるとそ聞えし。」とある（註37『新訂黒田家譜第一巻』四〇八頁）。

68　久野の最期は「黒田家譜」には次のように記されている。「猶敵陣へ馳かゝり、馬よりおり立小膝を折て鎗をかまへ敵を待うけ、向ふてかゝる者を討取。數人に手を負せ、勇氣を振ふ事甚盛なり。されども敵大勢なれば叶ハずして、次左衛門ハ終に討れにける。生年十九歳とぞ聞えし。（次左衛門が死したりし所ハ、鶴見原の内忠内が堀より、四町はかり南、立石の方なり。）次左衛門が家人、光富立右衛門（二十八歳）・麻田甚内（二十六歳）・稗田九蔵・下田作右衛門・久保庄助（二十一歳）等も、命を輕んじ義を重んじて、主人の前後左右に在て戦ひけるが、六人の者共一所にて皆討れにける。」（註37『新訂黒田家譜第一巻』四〇八頁）。吉弘に討たれたとするのは疑わしいが、これは作者が久野の最期を劇的に描くために敢えて改作したのではないかと考えられる。

69　小栗次右衛門は後藤左門の家人（註37『新訂黒田家譜第一巻』四一二頁）。

70　「黒田家譜」における吉弘統幸の最期は「家人の肩にかゝりて引退ける処を」、「何の苦労もなく突倒して首を取。」とある（註37『新訂黒田家譜第一巻』四一二頁）。

71　大野勘右衛門直生は天正十三（一五八五）年に羽柴秀吉が四国を平定した後、安国寺恵瓊に従った大野左馬右衛門直吉の子。弟に久弥氏重、忠右衛門吉乗がいる。勘右衛門・久弥・忠右衛門の三兄弟は、直吉の死後に豊前国中津へ移り住み、黒田二十四騎の井上之房を頼って黒田家に仕える。筑前入国後、井上之房が黒崎城を預けられた際、三人共に之房に与力として付けられ、勘右衛門は五百石の知行を与えられた（高山英朗解説「福岡市博物館常設展示室解説三三三　大野忠右衛門展」リーフレット）。

72　大野久弥氏重については註71を参照。筑前入国後、五百石を与えられる。

73　宗像掃部の最期については諸説ある。「黒田家譜」にはその最期の描写はない。江戸期の軍学者宮川尚古が記した「関原軍記大成」には「曾我部五右衛門は、武功ある者とて、如水より久野が後

見に付けられしが、久野を討たせては、主君に拝謁すべき様なしとて、面も振らず、敵陣へ馳せ入り、宗像掃部と、馬より組んで落ちけるが、刺違へて終に死す。」とある（黒川真道編『国史叢書　関原軍記大成』（一九一六年、国史研究会）六三頁）。「豊後陳聞書」（別名「黒田如水石垣原軍記」）にも「宗像掃部ハ曾我部五右衛門尉ト組テ、互ニ指違テ死トソ聞ヘシ。」とある（『続群書類従第二三輯上合戦部』（一九二四年、続群書類従完成会）二二八頁）、垣本言雄校訂『大分縣郷土史料集成』戦記篇所載）。

74　頭成（かしらなり）は現大分県日出町豊岡。別府湾の西岸が北へ延び、北岸へと東に曲折する地点の三川（さん）河口に位置する。江戸時代を通じ森藩領で、頭成湊を擁する町場として同藩の町奉行の支配下にあった（註66前掲書四三四頁）。

75　実相寺山（じっそうじやま）は現大分県別府市にある。石垣原扇状地の中央部にあり、標高一六九・八メートル。石垣原扇状地は慶長五（一六〇〇）年徳川方の黒田如水・細川家臣松井康之軍と、これを迎え撃つ大友軍との激戦があった所で、この合戦を石垣原合戦という（註66前掲書四七八・四七九頁）。

76　宗徒は「むねと」と軍記物語の決まり文句のようなもので、意味としては「宗となるものの意）ある集団の中で、主だった者。中心となる者。」とあり、「平家物語」にも「むねとの兵物（つはもの）卅余人」（註39前掲書下巻一二八頁）という用例がある。このことは石瀧豊美氏から御教示いただいた。石瀧氏からさらに、軍記物の決まり文句の出現頻度のようなものが、研究の手がかりになるのではないか、との御教示もいただいた。

77　吉良を討ち取った人物については諸説ある。「黒田家譜」、「豊後陳聞書」では井上之房の郎等、大村六大夫という人物が討ち取ったとある（註37『新訂黒田家譜第一巻』四一七頁。註73『続群書類従第二三輯上合戦部』二二七・二二八頁）。

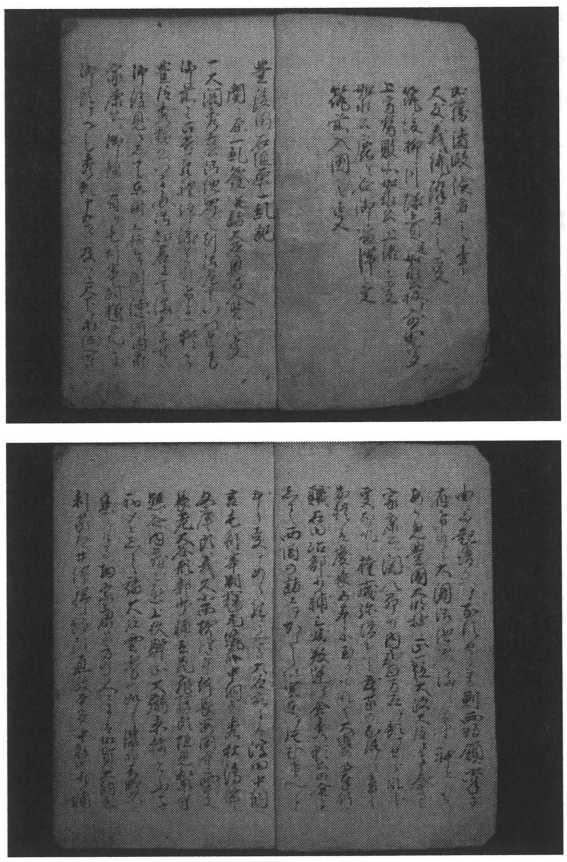
78　中川秀成は元亀元（一五七〇）年摂津国に生まれる。父は中川清秀、兄は中川秀政。朝鮮の役で兄秀政が戦死したため遺領を継ぐ。文禄三（一五九四）年二月、豊後国岡城七万四千石の城主となる。慶長五（一六〇〇）年九月段階秀政は岡城に在城して家康と誼を通じていたが（『寛政譜　第五』二七頁）、元大友家臣であり当時秀成に仕えていた田原紹忍・宗像掃部が石垣原合戦に際して中川家の旗印を盗み出して大友軍に加わったため、如水から石田方との嫌疑をうけることとなった。そのため秀成はその嫌疑を晴らさんがため石田方の臼杵城主太田飛騨守と戦い勝利を得た（著作者不明「西治録」（垣本言雄校訂『大分縣郷土史料集成戦記編』、一九七三年、臨川書店）七七六～七八六頁）。

79　「愚将なる左兵衛（ママ）へなれとも、弥然るへしとそ降参に極りける運の程こそ哀れなり、」という作者の義統評は極めて辛辣である。山本博文氏は、「中世の名のある武士の数は、それほど多いわけではない。武士としての行動は、武士社会のなかでは明らかであり、卑怯な行動をとればすぐに悪い評判が立ち、軍記などを通じて末代まで知られることになるという意識があったはずである。」（山本博文『武士と世間　なぜ死に急ぐのか』（二〇〇三年、中央公論新社）六八頁）とされる。しかし、他の軍記や史料、具体的には「黒田家譜」、「豊後陳聞書」（別名「黒田如水石垣原軍記」）、「関原軍記大成」では義統に対するこのようなマイナス評価は記されておらず、「愚将なる左兵衛」（義統）と「英勇才覚」、「御英勇」なる名将の如水という極めて分かりやすい二項対立的に描こうとする作者の意図が見て取れる。

※史料中の人名比定には『新訂寛政重修諸家譜』一～二二（一九六四～一九六七年、続群書類従完成会）、黒田長政と二十四騎展実行委員会編『黒田長政と二十四騎　黒田武士の世界』（二〇〇八年、福岡市博物館）、『週刊新説戦乱の日本史二五　九州の関ヶ原』（二〇〇八年、小学館）を利用した。

謝辞

この原稿執筆にあたっては、八幡郷土史会事務局長の児玉義信先生、九州大学大学院比較社会文化研究院高野信治先生から多くの御教示・御厚意を賜りました。ここに深く御礼申し上げます。



「石垣原合戦記」の一部（北九州市八幡西区生涯学習センター郷土資料室蔵）

"The Records of War in Ishigakibaru: Materials on the Biography and the Records of the 'Ishigakibaru' and the 'Sekigahara' Battles in Kyushu" (Volume I)

Takashi MORITOMO

"The Records of War in Ishigakibaru" is a record which illustrates the battle that had taken place in Ishigakibaru in September, 1600. This was a battle between Kuroda Josui, who took sides with the Eastern army (Tokugawa side), and Ōtomo Yoshimune, who took sides with the Western army (Isida side). In the same time, the Uesugi army (Isida side) Naoe Kanetugu led the battle against the Mogami army (Tokugawa side) in Hasedo castle. It is called "Sekigahara in the Tohoku district". In relation to this, the war in Ishigakibaru is called "Sekigahara in the Kyushu district".

The modern war tales such as "The Records of War in Ishigakibaru" have not been considered valuable either by historian or litterateur. Therefore, research on this war tale is yet to be done. These war tales, however, suggest that Josui and other samurais had character. In such an aspect, the readers of "The Records of war in Ishigakibaru" may find this record not only as a war tale but also as a biography.

The admiration for Josui and Kuroda family is one of the distinctive characters that this war tale contains. Also, the description of Josui is worthy of note. Josui's joy, anger, sadness and pleasure had been directly written down. It makes this war tale more valuable.

In fact, a single combat of Inoue Yukifusa (*karo* of Kuroda family) and Yoshihiro Muneyuki (*karo* of Ōtomo family) is typical of war tales. The brotherly love of Ōno Kanzaemon (older) and Ōno Kyuya (younger) is also commonly found in war tales. The former one is based on historical facts, but the latter one is based on fictional elements. I assume that the writer created these elements on purpose to give more value to literature. For this reason he added work of art to this record.

Unfortunately, the writer and the written date of this war tale have not been identified. However, the fact that we are able to know what the modern people, or 'edobito' thought is very important.